

琉球大学学術リポジトリ

沖縄引揚者の「外地」経験： 市町村史の体験記録を中心に

メタデータ	言語: 出版者: 沖縄移民研究センター 公開日: 2018-11-13 キーワード (Ja): 外地, 沖縄, 引揚げ, 市町村史, 移民史, 戦争記録 キーワード (En): colonized oversea area, Okinawa, repatriate, prefectural and municipal history, immigration history, record of war 作成者: 野入, 直美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/29214

沖縄引揚者の「外地」経験 —市町村史の体験記録を中心に—

野入直美

- I. はじめに
- II. 沖縄の市町村史における外地体験の記録
- III. 外地体験記録—〈語り〉の諸相
- IV. 記憶と記録のコンテキスト

キーワード：外地，沖縄，引揚げ，市町村史，移民史，戦争記録

I. はじめに

1. 「外地」とは何か

本稿では、沖縄県内で刊行された市町村史のうち、「外地」における体験を収めた記録をとりあげる。その中でもとくに南洋群島と満州¹⁾から沖縄に引き揚げてきた人びとの「外地」経験が、地域の歴史としてどのように記録されてきたのか／記録されてこなかったのかということ、地域史を形づくる文脈に照らしながら考察する。

ここでいう「外地」とは、日本帝国の勢力圏（植民地・占領地等）を指している。それは朝鮮半島、満州、台湾、フィリピンから南洋群島に及ぶ広範囲な勢力圏であった。そこに含まれる諸地域は、日本帝国の支配下にあった時期やその歴史的背景、渡航した日本人と地元社会との関係性、また第二次世界大戦における戦況をめぐって、それぞれに異なる位相を有していた。そのため、同じ日本帝国の勢力圏への人の移動であっても、それを経験した人びとによる意味づけの文脈はさまざまである。たとえば南洋群島への渡航者の経験には「出稼ぎ」や「徴兵逃れ」という文脈が見出され、あるいは現地女性との婚姻を含んだ地元社会との関係性が見いだせるが、そのような文脈や関係性は、満州においては見いだせない。一方で、渡満の経緯に多い「満蒙開拓青少年義勇隊への入隊」というような経験は、南洋群島への渡航には存在しない。

このような地域ごとの相違がある一方で、日本帝国をめぐるマクロな社会変動を経てきている点では、これらの諸地域には共通点がある。そこには、日本帝国の勢力圏であるがゆえの人口の流入、帝国崩壊に伴う社会秩序の解体と再編、そして「引揚げ」という人口の還流が含まれる。

本稿では、これらの構造的な特質を共有した範囲として「外地」という用語を用い、とくに南洋群島と満州における個人の経験について、市町村史の体験記録をもとに考察する。

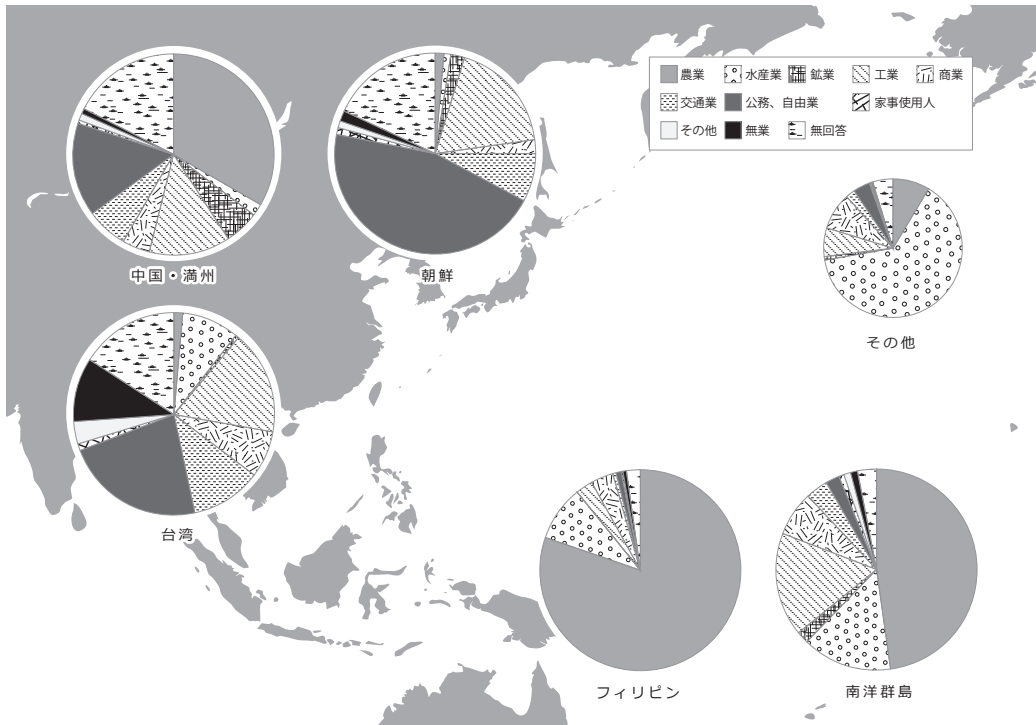


図1 沖縄引揚者の在外地域と就労構造

引揚者在外事実調査票より作成。「その他」は主にオランダ領インドとイギリス領マレーを中心とする地域である。

2. 外地における沖縄出身者の職業と階層

沖縄から日本帝国下の植民地・占領地へ、いつ、何人の人びとが渡航し、どのような生活を送り、どのように引き揚げてきたのかをトータルに把握することのできる数量的なデータというものは存在しない。外地国勢調査のデータは、調査年における居住者数や就労状況についての貴重な資料であるが、渡航と引揚げの全体像には射程が及んでいない。また、地域や調査年によって項目にばらつきがあるため、外地全体における沖縄出身者の姿を概観するという用途には適していない。

本稿では、体験記録を読み解く前に、引揚者在外事実調査票データを用いて沖縄引揚者の概観を試みる。このデータもまた、世帯主の情報しか含まれていないことと、自主的な申請によるものであることから、引揚者の全体像は網羅していない。ただし、南洋群島、フィリピン、台湾、満州、中国、朝鮮などの複数の地域にわたる、26,674票に及ぶ数量的データというものは他に類がない。沖縄引揚者の外地での生活のあらましを見る上では、貴重な情報源であると考えられる²⁾。

引揚者在外事実調査票データによると、南洋群島からの引揚げが13,173、フィリピン

表1 沖縄引揚者の在外地域と就労構造

	農業	水産業	鉱業	工業	商業	交通業	公務, 自由業	家事 使用人	その他	無業	無回答	合計
南洋群島	6,301	1,908	272	2,171	969	469	308	103	129	158	385	13,173
(%)	47.8	14.5	2.1	16.5	7.4	3.6	2.3	0.8	1.0	1.2	2.9	100.0
フィリピン	2,512	273	1	86	112	15	33	2	2	22	62	3,120
(%)	80.5	8.8	0.0	2.8	3.6	0.5	1.1	0.1	0.1	0.7	2.0	100.0
台湾	103	598	39	1,077	495	728	1,472	69	241	655	1,027	6,504
(%)	1.6	9.2	0.6	16.6	7.6	11.2	22.6	1.1	3.7	10.1	15.8	100.0
中国・満州	634	40	103	250	85	124	288	8	24	15	328	1,899
(%)	33.4	2.1	5.4	13.2	4.5	6.5	15.2	0.4	1.3	0.8	17.3	100.0
朝鮮	3	2	4	33	4	14	83	2	2	3	33	183
(%)	1.6	1.1	2.2	18.0	2.2	7.7	45.4	1.1	1.1	1.6	18.0	100.0
その他	153	1,128	14	121	153	39	67	6	5	4	81	1,771
(%)	8.6	63.7	0.8	6.8	8.6	2.2	3.8	0.3	0.3	0.2	4.6	100.0
不明	7	2	1	4	3	0	0	0	0	0	7	24
(%)	29.2	8.3	4.2	16.7	12.5	0.0	0.0	0.0	0.0	0.0	29.2	100.0
合計	9,713	3,951	434	3,742	1,821	1,389	2,251	190	403	857	1,923	26,674
(%)	36.4	14.8	1.6	14.0	6.8	5.2	8.4	0.7	1.5	3.2	7.2	100.0

3,120, 台湾 6,504, 満州 1,899, 朝鮮 183 であった。ここには、世帯主以外の引揚者の数は含まれない。

渡航地別の就労状況を見ると、全在外地域では農業(36.4%)が最も比率が大きく、水産業(14.8%)が続いている(表1・図1)。引揚者の数が多い南洋群島とフィリピンにおいて、農業と水産業についていた人びとの割合が大きいことが、全体の傾向に反映している。とくにフィリピンでは、農業従事者が引揚者の80.5%に達している。全体的に、南洋群島とフィリピンをはじめとする東南アジア・太平洋地域では、農業・水産業の比率が大きい。一方で、台湾・中国・満州・朝鮮からなる東アジア地域では、公務・自由業と工業の比率が大きくなっている。

ただし表1の分類では、「公務, 自由業」がひとつのカテゴリーにされているなどの制約があり、沖縄出身者の階層の広がりを見て取ることは難しい。そこで、従業上の地位を見てみると、在外地域全域では、ホワイトカラー13.8%に対して、肉体労働者は67.5%にのぼる(表2)。これも就労状況と同様に、人数の多い東南アジア・太平洋地域における傾向を反映している。対照的に、台湾, 満州, 朝鮮を含む東アジア地域では、ホワイトカラーの比率が大きい。

このような傾向を踏まえて、市町村史の体験記録では、サイパン(南洋群島)と満州という、職業と地位分布において大きく位相の異なるふたつの外地での事例を中心にとりあげることとする。それぞれの地域における典型的な就労の形、すなわちサイパンにおけ

表2 沖縄引揚者の従業上の地位

	経営・ 役員	正社員・ 準社員	工員・備 員・作業 員・女中	自 営	農業・ 漁業・ 鉱業	軍人・ 軍属	家事・ 学生	無 職	判定 不能	合 計
南洋群島 (%)	6 0.0	835 6.3	2,715 20.6	923 7.0	7,792 59.2	36 0.3	160 1.2	44 0.3	662 5.0	13,173 100.0
フィリピン (%)	5 0.2	52 1.7	78 2.5	120 3.8	2,780 89.1	4 0.1	20 0.6	3 0.1	58 1.9	3,120 100.0
台 湾 (%)	17 0.3	2,228 34.3	1,927 29.6	435 6.7	75 1.2	75 1.2	333 5.1	326 5.0	1,088 16.7	6,504 100.0
中国・満州 (%)	2 0.1	334 17.6	405 21.3	30 1.6	751 39.5	28 1.5	11 0.6	5 0.3	333 17.5	1,899 100.0
朝 鮮 (%)	1 0.5	102 55.7	62 33.9	2 1.1	3 1.6	1 0.5	3 1.6	0 0.0	9 4.9	183 100.0
その他 (%)	1 0.1	125 7.1	143 8.1	71 4.0	1,260 71.1	10 0.6	3 0.2	1 0.1	157 8.9	1,771 100.0
不 明 (%)	0 0.0	2 8.3	2 8.3	1 4.2	10 41.7	0 0.0	0 0.0	0 0.0	9 37.5	24 100.0
合 計 (%)	32 0.1	3,678 13.8	5,332 20.0	1,582 5.9	12,671 47.5	154 0.5	530 2.0	379 1.4	2,316 8.7	26,674 100.0

るサトウキビ農業、満州における満蒙開拓青少年義勇隊への入隊と開拓団への参加についての語りをおさえつつ、典型的ではなかった職業の従事者、たとえばサイパンにおける女性教員や、満州における助産婦といった人びとの体験記録にも着目する。それによって、数量データには表れることのないひとりひとりの個人にとっての「外地」渡航の意味づけがどのように地域の歴史に記録されるのか、とくに周辺化されやすい非典型的な体験が、どのような文脈のもとで地域の記憶となってきたのかを考察する。

II. 沖縄の市町村史における外地体験の記録

1. 外地体験を収録した県・市町村史の刊行

2010年までに沖縄県内で刊行された県・市町村史において、台湾、満州、南洋群島、フィリピンにおける体験が記されている記録の数は、817にのぼる(表3)。そのうち531の体験記録は『戦争記録』として、242の体験記録は、『移民史』として刊行された県・市町村史に収録されている(ここには「移民」と「戦争」の両方を含んでいる『宜野座村誌』1987年は含んでいない)。県・市町村史における「外地」体験記録は、「戦争」と「移民」という文脈がおおよそ7:3の割合で記録されている。

沖縄引揚者の「外地」経験
 —市町村史の体験記録を中心に— (野入直美)

表3 台湾・満州・南洋群島・フィリピンでの体験記録を収録した沖縄の県・市町村史一覧

発行年	大分類	書名	台湾証言数		満州		南洋群島		フィリピン		証言収集の方法 (手記/聞き書き)
			女性	兵士	女性	兵士	女性	兵士	女性	兵士	
1971	沖縄県史	第9巻各論編8 沖縄戦記録1	2		0		1		0		座談会・聞き書き
			0	0			0	0			
1974	沖縄県史	第10巻各論編9 沖縄戦記録2	17		0		6		1		聞き書き
			4	0			3	1			
1978	平良市史	第4巻資料編2 近代資料編	2		1		3		0		手記/聞き書き
			0	2	1	0	0	3			
1978	那覇市史	市民の戦時・戦後体験記録 忘れられぬ体験 第1集	0		0		1		0		手記/聞き書き
1979	那覇市史	市民の戦時・戦後体験記録 忘れられぬ体験 第2集	0		2		3		2		手記・聞き書き・座談会
					1	1	1	1	0	1	
1981	那覇市史	資料篇第3巻8 市民の戦時・戦後体験記(2) 戦後・海外篇	4		7		4		3		手記・聞き書き・座談会
			1	3	5	1	1	1	2	0	
1982	宜野湾市史	第3巻 資料編2 市民の戦争体験記録	2		7		18		19		聞き書き
			1	1	0	5	2	7	6	0	
1983	石垣市史	市民の戦時・戦後体験記録 第1集 —あのことわたしは—	7		0		0		1		手記・聞き書き
			5	1					1	0	
1984	浦添市史	第5巻 資料編4 戦争体験記録	1		0		10		3		聞き書き
			0	1			4	0	1	0	
1984	石垣市史	市民の戦時・戦後体験記録 第2集 —あのことわたしは—	6		0		0		0		手記・聞き書き
			5	1							
1985	石垣市史	市民の戦時・戦後体験記録 第3集	4		0		1		0		"
			2	1			1	0			
1985	名護市史	叢書1 語りつぐ戦争—市民の戦時・戦後体験記録第1集	1		0		1		0		手記・聞き書き
			0	1			1	0			
1985	北谷町史	北谷町民の戦時体験記録集第1集 沖縄戦 語ていいかな何時の世までいん	0		0		2		1		聞き書き
							1	1	1	0	
1987	西原町史	第3巻 資料編2 西原の戦時記録	1		5		10		1		手記・聞き書き
			0	1	0	3	1	6	0	1	
1987	宜野座村誌	第2巻 資料編1 移民・開墾・戦争体験	3		7		17		11		聞き書き
			1	1	0	7	2	12	4	2	
1988	石垣市史	市民の戦時・戦後体験記録 第4集	4		0		0		1		聞き書き
			2	0					0	0	
1989	座間味村史	下巻 戦争体験記・資料集・索引	0		1		2		0		"
1990	中城村史	第4巻戦争体験編	0		0		1		0		手記・聞き書き
1992	北谷町史	第5巻 資料編4 北谷の戦時体験記録 上	1		3		28		3		聞き書き
			0	1	0	2	9	9	0	2	

発行年	大分類	書名	台湾証言数		満州		南洋群島		フィリピン		証言収集の方法 (手記/聞き書き)
			女性	兵士	女性	兵士	女性	兵士	女性	兵士	
1992	国頭村史	国頭村海外移民史 本編	0		0		3 0 1		1		〃
1994	知念村史	第3巻 戦争体験記	0		2 0 2		1		0		〃
1995	沖縄市史	インヌミから50年目の証言	0		1 0 1		3		0		〃
1995	北谷町史	戦時体験記録	0		3 0 3		23 5 6		14 5 7		〃
1995	多良間村史	島びとの硝煙記録-多良間村民の戦時・戦後体験記-	18 3 4 2世: 1		3 0 1		2 0 2		1 1 0		手記・聞き書き
1996	城辺町史	第2巻 戦争体験編	8 6 1 2世: 1		16 0 14		2 0 0		1 0 1		聞き書き (口述)
1996	竹富町史	第12巻 資料編 戦時体験記録	17 8 7		2 0 2		5 0 4		1 0 0		聞き書き
1996	金武町史	第1巻移民・証言編	0		5 1 1		17 6 0 2世: 3		55 22 1 2世: 6		〃
1998	糸満市史	資料編7 戦時資料下巻-戦災記録・体験談-	2 0 2		6 3 2		14 7 2 2世: 2		2 2 0		聞き書き
1998	沖縄市史	資料集6 美里からの戦さ世証言	2 0 2		2 0 2		5 4 0		0		聞き書き
1999	東風平町史	戦争体験記	7 1 2 2世: 1		6 3 5		17 1 9		6 2 2		聞き書き
2000	嘉手納町史	資料編5 戦時資料 (上)	1 0 1		2 1 1		0		0		聞き書き
2001	西原町史	第6巻資料編5 西原の移民記録	0		0		1 0 0		0		聞き書き
2001	豊見城市史	第6巻 戦争編	1 0 1		0		2 0 2		3 0 2		聞き書き
2001	北中城村史	第3巻 移民・本編	0		3 0 3		8 3 4 2世: 1		20 3 5 2世: 2		聞き書き
2002	読谷村史	第5巻 資料編4 戦時記録上巻	3 1 1 2世: 1		9 5 3 2世: 1		9 3 0 2世: 2		5 1 0 2世: 1		手記・聞き書き
2002	具志川市史	第4巻 移民・出稼ぎ 証言編	2 0 0 2世: 1		0		0		0		聞き書き
2002	金武町史	第2巻戦争・証言編	0		0		3 2 1		9 6 0 2世: 1		手記・聞き書き
2003	大里村史	移民本編	2 0 2		13 0 6		11 1 1 2世: 1		17 5 1 2世: 3		聞き書き

沖縄引揚者の「外地」経験
 —市町村史の体験記録を中心に— (野入直美)

発行年	大分類	書名	台湾証言数		満州		南洋群島		フィリピン		証言収集の方法 (手記/聞き書き)
			女性	兵士	女性	兵士	女性	兵士	女性	兵士	
2003	嘉手納町史	資料編6 戦時資料(下)	1		0		0		0		聞き書き
			0	1							
2004	読谷村史	第5巻 資料編4 戦時記録下巻	3		3		0		0		手記・聞き書き・ 座談会
			2	0	1	1					
2004	玉城村史	第6巻 戦争記録編	4		0		2		0		聞き書き・手記
			0	3			0	2			
2004	佐敷町史	5 移民	0		0		8		3		聞き書き
							2	2	1	0	
							2世:2		2世:1		
2005	玉城村史	第7巻 移民編	1		5		15		2		聞き書き・手記
			0	0	1	0	5	1	1	0	
2005	具志川市史	第5巻 戦争編 戦争体験 I・II	3		0		53		4		聞き書き
			1	2			16	1	1	3	
			2世:2				2世:2				
2006	与那原町史	資料編1 移民	2		4		1		2		聞き書き・補足
			1	0	3	0			0	0	
			2世:1		2世:1						
2006	南風原町史	第8巻 移民・出稼ぎ編 ふるさと離れて	0		0		3		0		聞き書き・座談会
							2	1			
2006	北谷町史	附巻 移民・出稼ぎ編	0		4		24		10		聞き書き
					1	0	13	2	3	3	
				2世:7		2世:5					
2010	北中城村史	第4巻 戦争・証言編一	2		0		1		3		聞き書き
			0	1			0	1			
2010	北中城村史	第5巻 戦争・証言編二	2		1		3		6		手記・聞き書き
			0	2	0	1	1	0	1	2	
			2世:2		2世:2		2世:2		2世:2		
女性・兵士			42	47	27	65	98	77	69	34	
2世			6		1		22		19		
合計			135		126		344		212		

※戦争記録または移民史として刊行された市町村史であっても台湾、満州、南洋群島、フィリピンにおける体験の記録を収録していないものはこの表には含めていない。朝鮮などその他の外地の体験記録、および座談会形式の記録の数はこの表に含めていない。

台湾、満州、南洋群島、フィリピンでの体験を記録した『移民史』は、1987年の宜野座村誌が『移民・開墾・戦争体験』という、他の市町村史には類を見ない複数テーマ併記型で刊行されたのが最初である。外地経験を収録した『移民史』は、『戦争記録』よりも遅れて刊行され始め、2000年代以降に、沖縄における海外移民に対する関心の高まりを受けて、複数の市町村で刊行が相次いだ。『戦争記録』に比べて相対的に規模が小さいが、

新しい記録の文脈である。

体験記録を残している個人の属性としてまとまった規模があるのは、兵士である。沖縄で徴兵され、日本兵として外地に赴いた、あるいは渡航先で徴兵された経験の記録のうち、台湾、満州、南洋群島、フィリピンに関する記録は、合計で223であった。中でも満州は、満蒙開拓青少年義勇隊としての渡満はカウントせず、徴兵経験者だけを兵士として数えたにもかかわらず、兵士の体験記録の比率が高い（満州49.2%、全体27.3%）。

女性の体験記録は、4つの地域を合わせると236にのぼり、兵士の記録数をわずかに上回る。前章で参照した在外事実調査票データでは、世帯主の情報しか含まれていないために、女性の数が少ない（26,674票のうち4,762票：17.8%）。それと比べると、県・市町村史においては、女性の体験がより位置づいているといえる。それでも女性の記録は、体験記録全体の半数よりは大幅に下回っている。

在外事実調査票データからはさらに見えにくい属性として、外地で生まれ育った2世がいる。県・市町村史の体験記録では、いわゆる「植民2世」の体験は、22が記されている。地域別では満州が少なく（1名）、フィリピンにおいて相対的に比率が高い（19名：9.2%）。

本稿では、『戦争体験記』と『移民史』のそれぞれから事例を選び、ふたつの記録の文脈を比較する。また、女性や植民2世などの少数派の人びとの体験にも着目して事例を選ぶこととする。

2. 「戦争」と「移民」という文脈

外地体験を拾い読むというかたちで「戦争」と「移民」それぞれに焦点化された記録をひも解くと、両者のあいだには相当なかい離があることが見て取れる。

たとえば、『国頭村海外移民史 本編』（1992年）では、石川友紀がテニアン島やヤップ島での体験を聞き書きしているのだが、そこには調査者とインフォーマントの対話が記されている。

— 出稼ぎで向こうに行かれて、金儲けの点ではどうでしたか。大分、儲かりましたか。
金城「金儲けはできました。」

— （中略）じゃあ、移民してよかったというふうに。

金城「よかったです。戦争がなかったらもうなかなか帰らなかったですよ。あんな生活のいいところはない。あの原住民は泡盛をよく飲んでいて。自分が請負の時原住民に泡盛三合瓶を持っていったら、一日中でも働いた。三合瓶一本で、二名も三名も使われるよ。」

— 喜んでですか。酔っぱらった場合どうしますか。

金城「向こうは警察はいないから平気ですよ。」（国頭村1992：565）

一方で、同じ南洋群島からの引揚者の体験であっても、たとえば『北谷町史 戦時体験記録』（1995年）には、次のような文章がある。

「ジャパニー（他府県出身の日本兵）は怖かった。とても自分勝手に野蛮だった。（中略）ケガをしたジャパニーがやってくるなり、『出て行け！』と壕を追い出した。」安和千代『この野郎！』と一突き」（北谷町1995：498）

その後、安和千代は、同行者の女性が抱いている赤ん坊が泣くのを「この野郎！」と言って短刀で一突きする日本兵の姿を目の当たりにする。その場面が、この記録の表題になっているのである。

前者の『海外移民史』の記録では、すべてではないが、記録のいくつかは上述のような対話形式で記されている。ここでは、調査者が「儲かりましたか？」「よかったですか？」というような問いかけをし、それに対してインフォーマントが肯定的に答えている。

このような対話の形式、そして「儲け」という言葉をめぐる応答は、「戦争」を焦点化した県・市町村史においては、ほとんど見出すことができないものである。「住民の戦争体験記録」として刊行された市町村史においては、沖縄の地上戦を生き延びた経験が中心となり、いくつかの市町村史には例外があるものの、外地経験は相対的に周縁化される傾向が見いだせる。そして市町村史に収録されている場合も、戦争経験が焦点化され、渡航の経緯や戦火が迫る前の日常生活については記録されていないものが多い。そこには、渡航先の地域住民との関係などはあまり記されていないが、北谷町史の体験記録に見られるように、日本兵による住民の壕からの追い出しや殺害、食料の強奪についての記録はしばしば見いだせる。

安和千代は、日本兵を「ジャパニー」と呼んでいる。それは、「友軍」とは名ばかりの、日本兵による住民加害の実態が凝縮されているかのような呼称である。ここには、兵士—住民の加害／被害関係だけでなく、日本に包摂されながらもたえず異化され、抑圧されてきた沖縄の人びとの、日本人＝他者という感覚も示唆されているように思われる。

一方で、沖縄出身者で日本兵として外地に渡航した人も少なくない。いくつかの県・市町村史の戦争体験記録では、沖縄出身者の「被害」とともに「加害」の側面を踏まえようとしている。たとえば『浦添市史第5巻資料編4 戦争体験記録』（1984年）のまえがきにおいて、石原昌家は次のように述べている。

「本章では証言として記録してないが、『南京大虐殺』に象徴される中国民衆に対する残虐行為を行った皇軍兵士の一員として直接見聞きした人たちが多数退役して、在郷軍人会員となり村の指導者となりました。ところが、後に沖縄戦においてその多くは、防衛要員、兵士として戦死しました。中には自国兵士にスパイ視されて虐殺された人

もおります。その意味でも、皇軍兵士としての加害の側面と被害の側面が、沖縄戦に内在することを見落すべきではありません。」(浦添市 1984 : 13)

加害と被害の両面を真摯に受け止めようとすればこそ、聞き取り調査において、むしろ加害につながる行為を直接的に訊ねることが困難となり、「証言として記録していないが」ということになる。このような文脈においては、南洋群島における「儲け」という言葉もまた、たとえ語り手にとって豊かなリアリティを帯びていても、渡航先の地域社会に対する搾取であったという省察が成り立ちうる。「金儲けはできました」「酒瓶一本で、二名も三名も使われるよ」といった語りは、日本の植民地・占領地であった外地における体験の表象としては、ふさわしくないものとなっていく。

もちろん、すべての移民史が戦争体験記録と対照的に、肯定的でのびやかな記録に終始しているわけではない。そこには収入の上昇についての語りなどが含まれている一方で、過酷な逃避行、飢餓や捕虜としての収容などの戦争体験もまた位置づいているのである。

「戦争がなければ、きっと私たち家族はフィリピンで楽しく過ごしていたことと思います。戦争で大切な家族を8人も失いました。一言で『戦争』といっても、私には他人に語れない『悔やみごと』がたくさんあります。語ってみても、語った部分のごく一部にしかすぎません。その一部でも今の人にはわかってもらえるかどうか疑問です。」
崎原登子「フィリピン戦災孤児の祖国引揚げ」『北中城村史 第3巻 移民・本篇』(2001年) pp. 521

この「悔やみごと」という言葉には、戦後、自らの体験について沈黙するたくさんの人びとの思いを象徴するかのような重みがある。地域史として文字化されているのは、たとえば語ったにしてもその人の記憶の「ごく一部」、それも「今の人にはわかってもらえるかどうか」という諦念にも似た疑問を抱きながら語られた、記憶の断片なのである。

さらに、このような過酷な戦争体験をしなかった「外地」引揚者たちも、戦後において口を閉ざすことが多い³⁾。そのことは、戦争体験記録だけではなく移民史においても見いだせる。以下は、ひとりの朝鮮からの引揚者の聞き取りが、困難を極めたという一例である。

「事前のアンケート票には履歴もきちんとお書きになられ、当時の写真も提供して下さったのですが、いざ証言となると言葉がにぶり話をそらしてしまいます。まとまった体験記録にならず困りましたが、体験者の中には60年を経た今でも、話すに話せない記憶のわだかまりを抱えている方もいて、そのことは旧植民地との関係を考えるときの過去の重さを、否応なしに感じさせられました。」「編集後記」『与那原町史 資料

編1 『移民』(2006年) pp. 441

このように「戦争体験記録」と「移民史」を比べながら外地体験記録を拾い読んでいくと、「戦争」と「移民」という二つの文脈の相違と重なりが見えてくる。体験記録は、その内容以前に、個人の記憶を集めて地域の歴史に刻むという文脈と方法において、大きく左右されている。その文脈と方法によって、語られること／語られないこと、地域史に残されること／残されないことが定まってくる。我々が地域史として目にすることができるのは、人びとの生(ナマ)の体験そのものというより、そのような文脈と手法のフィルターを通過して構成された、地域の記憶なのである。したがって、そこに何が書かれているかという内容についての検討だけでなく、地域の歴史がどのような文脈においていかに記録されてきたのかという、コンテキストについての考察がきわめて重要となってくる。

3. 沖縄戦をめぐる記憶と記録の攻防

屋嘉比収は、沖縄における市町村史の刊行が質・量ともに興隆し、「地域史の時代」と称された1980年代に、「沖縄戦の語りにおけるマスターナラティブ」が形成されたとしている(屋嘉比2009:17)。ここでいうマスターナラティブとは、それ以降の沖縄戦の記録や語りにおいてくりかえし参照され、再生産されていく言説を指している。1980年代は、浦添市史において確立された悉皆調査という手法などを用いて、住民の戦争体験が広範囲に、かつ詳細に収集され、記録された時期であった。しかし、住民の戦争体験は、終戦直後から沖縄戦の記録において中核であったわけではなかった。屋嘉比は、「集団自決」をめぐる裁判闘争を重要な契機として、沖縄の人びとが沖縄戦の記憶を自覚的に問い直してきたことを指摘している。その過程は、戦争の記憶をただ引き継ぐという意味での「継承」ではなく、戦後世代を含めてその経験を共有しようとする、困難や葛藤を含んだ「学びなおし」として位置づけられている(屋嘉比前掲書)。

一方で、鳥山 淳は、戦後の日本と沖縄の政治的な関係および国際状況などの外在的な要因に着目して、沖縄戦をめぐる記憶の攻防をとらえている。鳥山は、1950年代から60年代にかけての日本と沖縄をめぐる政治的な関係のいびつさが、「軍民一体の沖縄戦」という「伝説」を形成してきたことを指摘した(鳥山2006:384)。そこでは、旧日本軍に協力してすすんで犠牲となっていく沖縄県民の“けなげさ”という「伝説」が、ひめゆり学徒隊などをシンボルとして表象されていったという。1960年代後半においては、「祖国復帰」という政治運動の文脈が影響力を及ぼし、沖縄戦は「日本人としての血」「日本のこころ」という言説によって慰霊されていった(前掲書:389)。

鳥山によれば、そのような沖縄戦の「伝説」が揺らぎ始めたのも、ベトナム戦の激化という外的な要因に大きな影響を受けていた。沖縄戦が、過去に属するものではなく、「日

常に感知される戦場との関係によって問い直される」中で、旧日本軍をめぐる記述を中心とする沖縄戦の記録は、住民側の体験や視点を主としていこうとする新たな潮流によって挑戦を受けることになったのである。それは同時に、文献資料を至上とする客観主義的な従来の歴史研究と、聞き書きや座談会という手法で住民の体験を積極的に収集し、さらにそれらの記録を、文献資料の補足ではなく地域の歴史の中核に位置づけていこうとする歴史研究との、歴史化の方法をめぐる攻防であった（前掲書：391）。

60年代後半における攻防の結末は、1971年に発刊された『沖縄県史 沖縄戦記録1』の「編集趣旨ならびに凡例」における、宣言のごとき文章に集約されている。「20万人に近い県民犠牲者の霊に報いるために生存者が代弁し、戦争がまたと行われなことを願って」、沖縄戦記録は刊行されたのである。沖縄戦におけるマスターナラティブとは、生存者が死者に代わって語る〈声〉であり、平和への希求に強く動機づけられて刻まれた、地域の記憶なのである。

現代の県・市町村史における戦争体験記録は、このような文脈の変動を経て、構成されてきたものであった。構築されてきたマスターナラティブは、それ自身の相対化という課題をおのずから内包している。屋嘉比は、90年代以降の沖縄において、「地域史の時代」のマスターナラティブがとり残した課題が明らかにされ、新たなとりくみが続いてきたことを記している（屋嘉比2009：18）。そこには、「島クトゥバで語る沖縄戦」などが含まれるのだが、県・市町村史においてはどのような展開がなされたのであろうか。

本稿では、沖縄の県・市町村史に記録されている、いわゆる「典型的な沖縄戦の語り」とは異なるいくつかの外地体験の記録をとりあげ、地域の歴史に外地体験を記録することの意味について考察する。

Ⅲ. 外地体験記録—〈語り〉の諸相

1. 徴兵忌避と南洋渡航

なぜ沖縄から外地に渡航したのかという動機や背景については、生活苦による出稼ぎと並んで、とくに南洋群島については徴兵忌避という言葉で語られることがしばしばある。徴兵忌避をめぐる以下の記録には、徴兵を「拒否」する力はいかんとしなくても持ちえない個人が、知恵をふりしぼってわが子を生き延びさせようとしている姿、ひとりの父親の生存戦略ともいべきものが描かれている。

「来年徴兵という年に、父が『お前は天皇陛下の息子でない、私の子だ。一番末っ子で、一番かわいいんだから徴兵検査で軍隊なんか行っちゃいかん。人を殺しても、殺されてもいけない』と言うんです。」具志堅徳慎・ヨシ「サイパンでの戦争」『名護市史

語り継ぐ戦争 市民の戦時・戦後体験記録 第1集』（1985年）pp. 178

息子である徳慎は、学校で先生に習ってきたことと全く異なる父親の言葉を「不可解」に思い、また、父親がいつも酒をあおってその勢いを借りて言うてくることもあって、「先生の教えの方が正しいんだ」とは思った。しかし、妻との離別が気がかりになったこともあり、「一応南洋に行って一徴兵忌避ができることを聞かされていたので一働いて、妻が生活できるくらい儲けてから徴兵検査を受ければいいじゃないかと考えて、」南洋へ行くことにしたという。

当時、沖縄から現地に渡航した人びとは、南洋興発株式会社でサトウキビの栽培と収穫の労務などに就くことが多かった。彼もこの会社の募集に応じようとしたのだが、またしても父が、のちに千金の値を持つ助言をする。「募集で行ったら自分の身動きがとれんから、自費で行きなさい」。徳慎が南洋で最後まで兵隊にとられず、生き延びて沖縄に生還したのは、自身の判断力や心身の強靱さにもよるのだが、父親の説得や助言に負うところが大きいように思われる。

この体験記録もまた、それが記録化された文脈に照らして読むことが可能である。もしも、鳥山が指摘した沖縄戦の「伝説」、県民がすすんで日本軍に協力し犠牲となったという1950年代から60年代初頭における言説がその後も主流であり続けたのなら、そもそも徴兵忌避のために南洋渡航をしたという体験は、地域史として残されることはなかったであろう。それ以前に、「お前は天皇陛下の息子ではない、私の子だ」という父の言葉は、それが発話された当時は、父も酒の勢いを借りなければ吐露できず、息子も「親父はまた酔っぱらっている」とでも解釈しなければ平静には聞き得えない、きわめて危険な心情であった。よって、1980年代の沖縄戦を記録する文脈において初めて、地域の記憶として残されるに至ったものであると言えるだろう。

しかし一方では、「軍隊なんか行っちゃいかん」と言いたくても言い得なかったあまたの親たち、どこへ逃れることも出来ずに徴兵されていった無数の死者たちが存在する。「南洋行きで徴兵を逃れた」という体験記録は、生存者が死者を代弁する沖縄戦のマスターナラティブからは、かなり遠い位置にあるように思われる。今後の社会的な状況の変化によっては、このような体験は、再び水面下に沈んでいくことがあるかもしれない。

2. 女性のサイパン渡航—移民と戦争の記録

徴兵される恐れなかった女性たちは、どのような動機や背景を持って南洋に渡航したのだろうか。ここで取り上げる一人目の女性、比嘉カマドの語りは、「外の世界への憧れ」というものに強くけん引された女性のサイパン渡航があったことをうかがわせ

る。

彼女は1914年に生まれた。小学生のころに母親が亡くなり、父親は再婚相手とフィリピンに渡航したため、祖父母に預けられた。

「私は農作業と家畜の世話に明け暮れる毎日がいやでした。経済的に苦しかったというわけではありません。閉じ込められているのが苦痛だったのです。そのころ、沖縄は不況のどん底にあり、小学校を出たばかりの少女たちが、阪神や京阪地方へ出稼ぎに行きました。貧しさから抜け出したいということの他に、都会生活にあこがれる気持ちもあったと思います。私は取り残されたような感じで、紡績でもどこでもいから、とにかく『外へ出たい』と思いました。出稼ぎの世話をする会社が那覇にあったので、申し込みをしたところ、保護者の印鑑と承諾が必要だと言われました。祖父母は家業を守るのが第一と許してくれず、私の『内地行き』はあきらめるしかありませんでした。」比嘉カマド「サイパンに夢を求めて」『北中城村史 第3巻 移民・本篇』（2001年）pp. 526

カマドはそのまま沖縄で結婚するが、夫も「財産もなく、沖縄では展望が開けない感じ」であった。夫の徴兵検査の時期が迫ってきたこともあり、徴兵猶予願いを出し、二人でサイパンに行くことになった。

夫婦は、南洋興発の直営農場で、日給制でサトウキビ栽培と収穫の仕事をした。沖縄で慣れた作業に苦労はなく、会社からトタン葺きの家を与えられ「食事は三食とも米の飯」で、沖縄にとどまっていれば望むべくもない生活となった。4人の子どもに恵まれたが、戦火が迫る前に夫は徴用にとられ、母子だけで山中を逃げる間に次男が被弾して亡くなってしまふ。「水が飲めたら死んでもいいと思った」という逃避行をへて捕虜収容所へ入れられ、1946年に、「何も持たずに」引揚げを果たした。

この体験記録は、後半の峻烈な戦争体験を含みつつ、それでもなお「サイパンに夢を求めて」という表題がつけられている。「経済的に苦しかったわけではなく、閉じ込められているのが苦痛だった」という語りには、この女性が感じていた閉塞感や外世界への憧れがにじみ出るようなリアリティがある。このような語りは、「戦争」ではなく「移民」の文脈で残されていることが多いように思われる。

同じサイパンに渡航した女性でも、南洋興発では働かず、専門職についていた人もいる。当時28歳であった知念春江は、昭和17年にサイパンへ、夫と二人で教師として赴任した。

「サイパン島は沖縄県人が人口の8割を占めているのに、ほとんど農地開拓の農民が多く、学校教員は他県出身者が多かった。沖縄からの教員が欲しいとの県人会の要望で、

それに応じて夫が出向を命ぜられた。」知念春江「玉砕の島サイパンで」『座間味村史 下巻 戦争体験記 資料編・索引』(1989年) pp. 185

「出向を命ぜられた」という表現には、サイパン行きが夫婦の主體的な選択ではなかったことが示唆されているように思われる。1978年に刊行された『那覇市史』に収録されている、やはりサイパンで教員をしていた屋嘉 勇の体験記録によると、昭和17年のサイパンにおける沖縄県出身教員は14人であり、うち二人が女性であった。春江は、そのうちの一人であると思われる。屋嘉の記録によると、その14人のうち6人が戦死し、1人が遭難死し、1人が病死した。沖縄に戻れたのは、春江を含む6人だけであった(那覇市1978:121-130)。

春江が赴任した2年後には、空爆で日常生活が途絶した。農家に避難し、学校は各部落配置の青空学校とされたが、授業らしいこともできなくなった。3月2日から「婦女子と老人の強制送還」が始まったが、引揚船が撃沈され、帰路も閉ざされてしまう。残った人びとは「地獄の戦闘に巻き込まれ」、春江も子どもを連れて海岸と壕を転々とした。「日本兵に、(赤ん坊を)『泣かすな、出て行け』と何回となくどなられ」、集団自決を目の当たりにしながら、かろうじて生きて収容されたという。

前述の比嘉カマドの体験記録と比べると、専門職である知念春江のほうに、むしろ主體的な渡航の意思や、生活水準の上昇を果たしたという記録がない。職業生活が短かったためか、仕事に関する記述もほとんどない。そして、春江の記録には「玉砕の島サイパンで」という、カマドのそれとは対照的な表題がついて、『戦争体験記』として残されている。二人は共通して死地からの生還をしており、逃避行の経験には共通点が多い。一方で、「移民」の文脈では戦争以前の渡航や日常生活にも重点がおかれているため、カマドの記録には戦争体験とは異なる要素が含まれている。「移民」と「戦争」いうそれぞれの文脈で、異なる着眼点をもって聞き取りと記録化がなされるとき、サイパンは、「夢」を託された島とも、「玉砕の島」ともなるのである。

3. 満州引揚者における階層の広がり

カマドと春江の体験記録が示唆するように、外地渡航前の生活水準が低かった人の方が、渡航後の相対的な上昇や主観的な満足感を覚えることがある。そのことは、満州引揚者の記録からも読み取れる。

嘉数 勇(当時16歳)は、「四男だからどうせ成長したらどこかに行かなくてはいけない立場」であり、「意を決して、未知の世界、満蒙開拓青少年義勇隊に希望した」という。茨城県内原での3カ月の訓練期間中に、すでに彼の貧しい生まれ育ちは、満蒙開拓義勇隊におけるひとつの資質として体験されていた。

「非常時といっても米に麦を混ぜてのご飯だった。沖縄で毎日、芋と野菜の汁を食べていた私にはごちそうに思えた。しかし、大和人の中にはおいしくないと言ってぐちをこぼすのもいた。私は義勇隊に入ってから、身長も体重も増えていた。」嘉数 勇「満州開拓青少年義勇隊」『東風平町史－戦争体験記－』（1999年）pp. 105-109

「憧れの満州」に渡った後も、勇は幻滅を覚えない。極寒の現地では、冬季は農作業ができないため、午前中は薪を集め、午後は農業学校同様の授業が行われた。勇はそのような青少年義勇隊のカリキュラムを、きわめて肯定的にとらえている。

「家庭が貧しく中学校にも行けないものにとっては都合のよい学習の場であり、心身の訓練所でもあったわけである。戦後、日本では満蒙開拓義勇隊の3カ月の訓練を終えたものは戦前の農業実業学校同等の学歴が認められたと聞いた。」（前掲書 pp.107）

3年間の任期が終了すると、ちょうど徴兵検査を受ける年齢になっていた。勇は第二種だったために召集されず、郷里に近い知念村などの開拓団に入植させてもらい、事務所の書記の仕事をした。昭和19年には召集され関東軍に編入されるが、フィリピン行きの予定が急きよ台湾へ変更となる。移動中に3隻のうち2隻までが撃沈されたのだが、勇は助かった1隻に乗って台湾に到着した。地上戦を覚悟していたのだがそれもなくて、沖縄に帰還することができたという。

満蒙開拓青少年義勇隊に入隊した零細農家の少年たちは、兵農としての訓練を施され、任期終了後の徴兵、関東軍への編入、激戦地への配置というコースをたどることが多かった。客観的に見れば致命的とも言うべきライフコースが既定しているのだが、当事者である勇にとって意味をもったことは、自分にはごちそうである日々の食事、実際に伸びる背丈と増える体重、そして沖縄にとどまっていたのは決して受けられなかった教育であった。

彼の体験記録には、戦争の残酷さや彼自身の苦闘についての記述がほとんど存在しない。これもまた、沖縄戦のマスターナラティブからは距離のある記録であると言えるだろう。

では、外地でこのような上昇や満足を味わうべくもなかった人、むしろ沖縄で相対的な上層にあった人の体験は、地域の歴史にどのように記録されているのであろうか。『与那原町史 資料編1 移民』（2006年）に収録されている古謝雪枝・町田咲子姉妹の体験記録は、もと首里士族の令嬢が、その文化資本と誇りをもって引揚体験をいかに生きたかということを豊かに伝えている。

古謝雪枝は1914年生まれで、調査時の年齢は89歳である。彼女の家は、祖父の代まで首里に暮らしたユカッチュ（士族）であったが、「ユカッチュは廃藩置県でなくなって与那原に都落ち」を余儀なくされた。外地渡航以前に、この「都落ち」こそが一族にとって重要な意味を持つ移動であり、社会階層の下落であったことが示唆されている。それでも

彼女の父親は、娘の記憶の中では特権的な階層であり続けた。彼は山原船をもち、妹に久志山原で店を出させ、山原行きの船にはその店で売の商品を積み、帰路は那覇に向けて材木を載せて運んだ。人びとは、彼とその家族を「チュジュ」(寄留民)と呼んだ。雪枝にとって父は、「琉歌にある『廃藩の士(ハイパンノサムレー)』と敬されるにふさわしい人であった。

娘たちは当時の女子としては高い水準の教育を受け、職業婦人としての道を歩んでいく。雪枝は第一高女を卒業後、那覇市の助産婦養成所で免許を取得した。1934年に大阪に行って結婚し、1940年に夫の仕事の都合でハルピンへ渡航し、そこで助産婦の仕事をした。

妹の咲江は、雪枝の出産の手伝いのためにハルピンに来た。彼女は姉より5歳年下で、首里高女を卒業し、ハルピンでは電話交換手として働いた。戦火が迫るまでの日常を、咲江は「ハルピンには映画館とかデパートなんかもあって、姉も一緒に図書館にも行きました」と振り返る。

都市生活を楽しむ日常は、敗戦によって終焉する。雪枝と咲江は、1946年の引揚げまで、魚を仕入れて売り歩いて糊口をしのいだ。

「それ(引揚げ)までは物を売ったりして一生懸命やりました。でも楽は楽だったです、戦争の苦労はわかりませんもの。(中略)敗戦後は魚を仕入れて、妹の咲子が小売して稼いでました。男の人はサムライみたいで商売も何もできないけど、私たちは食べないといけないでしょ。」「ハルピンでのこと—古謝雪枝、町田咲子」『与那原町史 資料編1 移民』(2006年) pp. 385-387

この「男の人は…」というくだりは、魚売りに出かけた雪枝の夫が、「戸を叩いてもなかなか返事しないから、『偉そうに』って喧嘩して、商売にならないから私たちがやったんです」という顛末を受けての語りである。戦中の夫の仕事については、「そのころロシア軍の仕事をやってお金は大分ありました」という短い記述がある。魚売りに身を落とすことなど思いもよらない生活であったことがうかがえる。

雪枝と咲江の姉妹は、「食べていけないといけないでしょ」という現実的な割り切りをした。姉は魚を仕入れ、助産院の、赤ん坊の体重を量っていた測定器で魚を量り、妹がそれを売り歩いた。

ふたりは、このような状況下で、元首里士族の令嬢として身につけた意識や慣習、職業婦人としての生き方を持ち続けているように見える。雪枝は、沖縄に持ち帰ろうとした「私の良いお召(着物)」が「ハルピン駅の検査で全部取られました」ということを、引揚体験の中で特記している。そして引揚げ後、彼女は沖縄本島中部の桃原(現在の沖縄市)で、請われて助産婦として働くようになった。「外人、黒人なんかがいっぱいて道を

歩けないぐらい」の街路を、「ズボンをはいて、軍からもらった靴をはいて」歩いたという。

咲江にとって、引揚体験で特筆されるべきは、本をめぐるできごとであった。ハルピンの書店で購入していた伊波普猷の本を、「この本は沖縄出身の方のだって思って、大事にリュックに入れて」持ち歩いていたのだが、盗難にあってしまう。それでも「引き揚げ船の中で本をもっている人がいたから、それを借りて小さなランプをかざして一生懸命写しました。」沖縄に戻った後も、配給を待って並んでいるときに本を持っている人を見かければ勇気を出して頼みこみ、借りた『森鷗外全集』を写筆したという。「私は歌をつくってますけど、でも故郷を離れたら、誰でも歌ができるようになりますよ、私はそう思いますね」という言葉で、咲江の回想は閉じられている。

「故郷を離れたら歌ができるようになりますよ」という語りもまた、引揚者の言葉としてはユニークである。二人の姉妹の体験記録は、沖縄戦のマスターナラティブからも、引揚者における「苦難の逃避行」などの典型的な語りからもかなり遠い。「苦労談」の色合いがきわめて薄いこのような体験記録もまた、「戦争体験」よりは「移民」の文脈において残されていることが多いように思われる。

4. 沖縄出身者であること、日本人であること－「植民2世」の記憶

外地における階層の広がり、沖縄での身分や出身地だけに左右されるものではなかった。いくつかの体験記録は、そこに「ヤマトウンチュー（大和人）」と「ウチナーンチュ（沖縄人）」、さらには現地の人びととの間の格差やあつれきがあったことを示唆している。

「2カ年の養成期間が終わると、どの分野に行くかという、ある程度の希望、出させるわけよ。ところが、あの当時もうはっきり見えていたのは、沖縄県人軽視があるさ。私どもは鉄道の関係の仕事で、日本人がどうせー、ああせーということ指導して、実際の働くのは満人さあね。僕は本当は総務関係を希望したんだけどね。ヤマトウンチュー（大和人）は希望通りにいったけども、沖縄の皆さんはそうじゃなかったよ。ほとんど軽視されていたさあ。」 餘平名浩「南満州鉄道株式会社」『城辺町史 第2巻 戦争体験篇』（1996年）pp. 409-410

憧れの満鉄マンになろうとした餘平名浩は、「沖縄県人軽視」の壁に突き当たる。彼は希望した総務の仕事には就けず、補線区の管理・点検を行うことになった。沿線の草むしりまで行う雑多な労務なのだが、ここで彼は、外地における階層上昇を体験する。それは、「あぐらをかいて」「満州人」を使役するという体験であった。

「実際は中国人がそれをやるけど、私らはあぐらかいてその管理をするだけ。だから満州人から言われたさ。『おまえら子供のくせに何か』と言って。初めて満州に行くと、日本人は『一等国民』という誇りみたいなことを考えて、本当によかったなあと思ったださ。」(前掲書)

この語りからは、「ヤマトンチュー」との関係において蔑視され、一方で満州の人びとに対しては「一等国民」「日本人」の権威をもって接したひとりの沖縄出身者の心情がうかがえる。

これを収録した『城辺町史』は、語り口を大幅に残した口語によってつづられている。また、「満人」などの、現代の文脈において不適切とされる言葉を注釈抜きで記しており、あまり編集の手が入っていない体験記録となっている。それは、『城辺町史』が刊行された90年代において、他の多くの市町村史が、聞き書きの手法を洗練させていったこととは対照的である。しかし浩の語りにおいては、むしろ口述の体験記録が、「満人」を使役する中で日本人であることの満足感を抱いたひとりの少年のリアリティを伝えている。

「沖縄県人軽視」によって損なわれた自意識は、「満人」の使役という特権的な行為を通じて、「日本人でよかった」という満足感と帰属意識へと回収される。浩の意識は、いわゆる「抑圧の移譲」に類するものではあるが、そこには「被害と加害」という二元論的な枠組みに収まらない外地経験者の生の複雑さが含まれているように思われる。

しかし、日本帝国の支配に裏打ちされた外地ならではの階層上昇は、敗戦と帝国の解体によって崩壊する。国家や組織の庇護を失った人びとは、むき身の個人として、現地の人びとの復讐に向き合わされることになった。

「よく片手に魚を持ってやって来たり、一緒に酒を飲んだりしていた島民とその友人らしい2、3人が松に襲いかかってきた。松はなんとかその場を逃れた。『年をとっていたら殺されていただろう』と松は言う。そのことがあってから、戦後に再びパラオに行く気がなく、行ったことはない。」津波 松『読谷村史 第5巻 資料編4 戦時記録上巻』(2002年) pp. 560

「これまで毎日洗濯の賃仕事に通い来てくれていたお手伝いが、その日を限ってこなくなり、(中略)『どうして手伝いに来てくれないの』と尋ねると、『日本は負けたじゃないか、これからは、私どもがあなたたちを使うよ』とうそぶき、顔をそらせて過ぎ去りました。」山城ミエ「敗戦を台湾で迎えて」『石垣市史 市民の戦時・戦後体験記録 第2集』(1984年) pp. 96

津波 松も山城ミエも、思いもよらぬ「形勢の逆転」に、がく然としている。一方で、いくつかの体験記録は、この帝国の崩壊に際して、なぜ自分たちが現地の人びとの復讐的になるのかという省察を含んでいる。そのうちのいくつかが、外地で生まれ育った「植民2世」の体験記録であることはきわめて興味深い。

「でもこれは、日本人がひどいことをしたからなのだ。日本人がもう少しきちんとしておけば、あれほどの苦労はせずに済んだのに、と思う。向こうでの開拓団の生活を見ていても、周辺に住んでいる現地の人々が飼っている豚を、ただ面白半分に鉄砲で撃ち殺して、その飼い主を泣かせたりしていた。また現地の人々が少しでも悪いことをすると、『見せしめ』の制裁とって、ひどい暴力をふるっていた。子どもながらにあのような光景を見るのはとても辛かった。あの人たちも食べるものがなかったから、そうしたはずなのに。開拓団の中でそのようなふるまいをしていた人は、形勢が逆転したときに現地の人びとの復讐を受けた。反対にその土地の人にやさしくして友好を温めていた人は、かくまってもらったり助けてもらったりしていた。自分がやったことは必ずまた自分に返ってくると思った。」玉城キク「開拓団長だった父のこと」『読谷村史 第5巻 資料編4 戦時記録 上巻』(2002年) pp. 691

成田龍一は、戦争体験の手記における「植民2世の記憶」が、しばしば親世代による記憶や体験語りへの「異議申し立て」を含んでいることに着目した。成田は、「父母たちとは異なる『引揚げ』の記憶と歴史像の形成がここから始まる」として、「植民2世」による記憶の異化作用を重視している(成田2003:173-174)。玉城キクの考察には、ひとつの「父母たちとは異なる記憶と歴史像の形成」につながりうる要素が見いだせる。それは、日本人による現地の人びとに対する加害についての、日本人批判を含んだ語りである。

ただし、キクの記録の中には、開拓団長であった父親に対する批判は含まれていない。彼女が批判的に顧みるのは、あくまで「手荒な事をしていた日本人」であり、帝国崩壊時の日本人への攻撃は、そのような手荒さに対する復讐と解されている。そこには、植民地支配や満州開拓そのものに対する「異議申し立て」は含まれていない。

キクが回想する父親は、「読書家で、いつも本を読んでいて、広い世界を見ているような人」であった。彼は農業指導員として満州に派遣され、現地で開拓団長となった。ハルピン郊外に土地を買って農場を経営し、郷里の読谷から人を呼び寄せていたという。キクは、「ずっと満州で生きていくつもりで、いろいろなことを考えていたのだと思う」と語っている。敗戦後、収容所で難民救済に尽力した父親は、「手荒な」日本人たちとはまったく異なる人として、敬意を込めて回想されている⁴⁾。

「植民2世」は、しばしば、外地における自身の立ち位置、そして「引揚げ」という名の見知らぬ故郷への移動について、沖縄生まれの渡航者とは異なる視点で語っている。玉城キクの体験記録を収録した『読谷村史 第5巻 資料編4 戦時記録上巻』(2002年)には、「フィリピン生まれの私」と題された「植民2世」の体験記録も収録されている(読谷村2002:595-596)。読谷村史発刊の前年には、北中城村史が、やはりフィリピンで生まれ育った2世の体験記録を収録している(玉城峯子「フィリピンでの戦争体験」『北中城村史 第3巻 移民・本篇』(2001年) pp.510)。そこからは、親たちが話すウチナーグチを解さない「植民2世」たちの姿が浮かび上がる。ある人は沖縄差別を経験し、ある人は沖縄への帰属意識も劣等感もない。そして2000年代に自らの体験を語る時点では、「今はむしろウチナーグチが話せないことが残念だ」と語る人がある。そこには、「植民2世」のアイデンティティの変遷ともいうべき過程がうかがえる。

2000年代に入ると、沖縄生まれの外地渡航者たちが高齢化し、それに伴って市町村史には、幼少期に親に伴われて渡航した世代、または現地で生まれ育った世代の体験記録が散見されるようになっていく。そして「植民2世の記憶」は、親世代の体験記録にはあまり記されなかった要素を含んで、地域の歴史に残されていくのである。この時期に発刊された複数の市町村史には、沖縄戦のマスターナラティブに収まりきれない「外地」体験が、「植民2世の記憶」を含めて記録されている。

一方で、「植民2世の記憶」の「異化作用」は、玉城キクの体験記録が示唆するように、限定をはらんだものであることにも留意が必要であろう。キクは、現地住民の豚を面白半分には殺すような日本人の行為を批判するが、父や自分自身を含めた日本人が満州に入植していたことの意味にまでは、考察は及んでいない。「植民2世の記憶」とは、もともと当事者によって「異議申し立て」を意図して発された語りではなく、むしろマスターナラティブの相対化を試みようとする側の営為のうちに、「異化作用」として見出されたものであるとも考えられる。その意味で、「植民2世の記憶」もまた、それを記録し、あるいは光をあてようとする文脈を踏まえて読み解かれる必要がある。

IV. 記憶と記録のコンテクスト

阿倍安成・加藤聖文は、内地の日本人と「植民地・占領地の日本人はまったく別の8月15日を迎えた」こと、「戦後日本人の間に戦後のスタート時点から越えがたい、深く暗い溝が存在していたこと」に着目している(阿倍・加藤2004:139)。阿倍・加藤によれば、引揚者は、アジアとの関係を濃密なものとして体験し、引揚過程で戦後国際政治の過酷さを身をもって体験したのだが、戦後において引揚問題は「社会に埋没し」、「関係者の体験談のかたちでのみ語り継がれることになった」。そのことは、多くの日本人による「大日

本帝国」の歴史の忘却，さらには東アジア諸国との歴史認識をめぐる軋轢の要因ともなったという指摘がなされている。

この批判的な指摘に照らしてみれば，沖縄の市町村史における外地引揚者の体験記録は，「戦争体験」と「移民」それぞれの文脈において多様で豊かな記録を地域史に残しつつも，沖縄にいた人びとと外地にいた人びととの間の「越えがたい，深く暗い溝」を埋めるには至っていないように思われる。一方には，平和を希求して生者が死者を代弁する〈声〉としての，沖縄戦のマスターナラティブがある。そこから外れた語りは，住民の体験の多様性という範疇に入るものが，主流をなす言説からは遠いままに散在している。他方で「移民」の文脈は，しばしば「戦争体験」の文脈よりはきめ細やかに，ひとりひとりの外地渡航と引揚げをめぐる意識と行為を記録している。ただし「移民」の文脈においても，外地渡航は敗戦と引揚げによって終焉したものであり，「世界のウチナーンチュ」や「海外で活躍する沖縄県系人」などの，沖縄移民をめぐる今日的な，肯定的な言説にはつながらない。外地体験は，「移民」の文脈においても，「海外雄飛」のような一般化した言説からは相当に遠いのである。

その中で，宜野座村誌に記されているひとつの体験記録は，市町村史としても地域史としても，例外的な内容を含んでいるように思われる。そこには，学術研究の領域では議論されていても⁵⁾，地域住民の実名をあげて市町村史に記録化することは憚られてきたセンシティブな問題が含まれている。

「昭和12年，私が23歳のとき，現地の女性と結婚しました。4名の子どもに恵まれ幸せな生活をしていました。沖縄人同志で組合を組織して鰹漁業に従事することになり，私は鰹釣りの餌の責任者として，現地の男の人を30名くらい雇っていました。沖縄人と現地人はとても仲がよく背丈は沖縄人によく似て，とてもおとなしかったです。また日本人を「だんな」と呼んで敬い，日本人は「だんな」になりきっていました。（中略）私はセレベスで召集されて以来，現地でも一度も妻子と会っておりません。便りもないままに今日に至っています。ただ現地に残した妻子の幸せを，この地から祈るだけです。」玉城誠七郎「セレベス出稼ぎ」『宜野座村誌 第2巻 資料編1 移民・開墾・戦争体験』（1987年）p.173-176

この体験記録もまた，「戦争」と「移民」それぞれのマスターナラティブからは，きわめて遠い。現地の妻と子どもたちが今も現地にいるはずだという語りは，他の市町村史の「戦争体験」にも「移民史」にも，類を見ないものである。旧植民地・占領地における「現地妻」と「混血児」の存在は，他の地域史編纂の現場において，敢えて訊ねられず語られることもない暗黙知であり続けてきたと考えられるが，宜野座村誌だけは，それに触れた

体験記録を収録しているのである。

外地における妻子、そして「混血児」の問題は、帝国支配の問題が清算されないまま現代に続いていることを示唆している。それに向き合うことは、阿倍・加藤が指摘した植民・占領下の「アジアとの濃密な関係」を埋没からすくいあげ、現代の文脈に位置づけることにつながりうる。「過去の苦難を記録し、平和を祈念する」という地域史のマスターナラティブを異化するものがあるとすれば、それは、日本人と結婚した現地女性と「混血児」の子どもたちだけが発することのできる、サバルタンの〈声〉であるかもしれない。それは、自身の体験や思いを語ったり歴史に残したりする手段を持たない人びとの、現実には発話されることのほとんどない〈声〉である。

宜野座村誌にも、これらの人びとの体験記録は収録されてはいない。しかし、編集委員の平織善福はフィリピンで、ダバオ在住の植民2世の協力を得て現地調査を行っているのである。さらに平織は、「比国在住の村人関係者の2世、3世に対する留学制度の配慮はできないものか」という、これも従来の市町村史の枠をはるかに突き抜けた提言を書き記している（宜野座村 1987 : 190）。その平織が記した現地調査報告は、編集後記でも付記でもなく、体験記録が並ぶ本文中に収録されている。宜野座村誌は、それぞれに個性豊かな沖縄の市町村史においても、型破りとも言いうるような独自性をもっているように思われる。

宜野座村誌の構成上の特徴は、「移民」と「戦争体験」を分別せず、『移民・開墾・戦争体験』と題して地域史を刊行していることである。外地経験の記録が掲載されている沖縄の市町村史において、「移民」と「戦争」を分別していないのは、この宜野座村誌のみなのである。「移民」と「戦争体験」それぞれを焦点化した他の市町村史には、明確なテーマと一貫性があり、そのテーマに基づく体験記録の充実した蓄積がある。一方で、「移民」と「戦争」を分けなかった宜野座村史の体験記録には、これまでの「移民」または「戦争体験」の文脈ではすくわれてこなかった語り、過去の歴史として記録するだけでは終わらない問題への言及が見いだせる。

宜野座村誌は、基調としては、1980年代に刊行された他のあまたの市町村史と同様に、住民の体験の聞き書きを地域史の中核に刻もうという志向を有している。編集委員である歴史学研究者の安仁屋政昭は、冒頭の「総説 — 聞き書きについて」において、「これまでの歴史研究においては、証言記録（ORAL HISTORY）を軽く見る風潮が支配的であった」と述べている。ここには、文献至上主義を批判的に乗り越え、資料には残されていない住民の側の視点を重視して地域史を刊行しようとする意思が示されている。

宜野座村誌は、一方では、聞き書きによる口述の歴史を地域史の中核に刻もうとする、

典型的な「沖縄戦のマスターナラティブ」に連なる志向を有しつつ、他方では、それを突き抜けていく要素をはらんでいた。そこには、それまでの沖縄の市町村史が外地経験を記録してきた二つの文脈である「戦争体験」とも「移民」とも異なる第三の文脈、「ポストコロニアルのコンテクスト」ともいうべきものの萌芽が見いだせるように思われる。それは、日本帝国時代における「濃密なアジアとの関係」を、過去の出来事として埋没させず、現代の文脈に位置づけなおす文脈である。

そのような文脈は、宜野座村誌において萌芽し、その後、再び水面下に沈んでいったように見える。「現地に残した妻子」に言及する語り、「2世、3世の留学支援を」という問題提起、そして「遺棄妻子」を射程に含めた沖縄引揚げの考察（安仁屋 1996：13）はいずれも、90年代以降の市町村史においては見いだせないものとなった。

1990年に日本の出入国管理法が改正され、「日系人」と呼ばれる人びとに入国と就労の門戸が開かれる時代が訪れた。そうなるから、旧植民地・占領地に在住する2世、3世についての記述は、沖縄の市町村史においてむしろ途絶したのである。そのことの意味を批判的に考察するとき、「戦争」または「移民」というものとは異なるもうひとつの文脈、ポストコロニアルのコンテクストによって外地体験記録を地域史に刻む可能性が見えてくる。その文脈は、外地経験を「戦争」もしくは「移民」に分別するのではなく、その両者を架橋するものとしてとらえるものになるのではないかと思われる。

謝辞

本稿で用いた沖縄県・市町村史の体験記録については、森亜紀子氏が作成した沖縄県・市町村史 引揚者証言一覧を参照させていただいた。また、引揚者在外事実調査票については宮内久光先生に懇切な助言をいただいた。記して感謝します。

注

- 1) 台湾については、拙著 2013 で考察を試みた。
- 2) 引揚者在外事実調査票とは、外地引揚者の在外私有財産保障問題の審議に必要な資料を得るため、1956年に厚生省が行った悉皆調査で得られた個票である。沖縄県では福祉保健部福祉・援護課が所蔵している。琉球大学国際沖縄研究所・移民研究部門では、地理学研究者の宮内久光が中心となってこの個票をデータベース化し、研究に活用している（宮内 2004, 同 2008, 同 2009）。引揚者在外事実調査票の個票には、世帯主（申告者）本籍市町村、本籍字、性別、終戦時住所、出生年、渡航年、渡航時年齢、引揚げ年、在外地域、在外地域における職業、従業上の地位などが記入されている。

- 3) そこには、沖縄における地上戦の惨禍に比べれば、とくに台湾などの戦争被害は軽微であったという引揚者自身による認識があった（「沖縄に比べ台湾は戦争とは言えない」北谷町史 1992 : 665）。また、植民地で教育を受け、日本人であることに何の疑いも抱かなかったというような体験は、廃藩置県の歴史から現代の米軍基地の集中にまで一貫する、本土による沖縄の「異化」に対する抵抗の文脈で沖縄戦を地域史として刻もうとする沖縄の県・市町村史においては、整合しがたい要素をもっていた（野入 2013）。
- 4) もしかすると、満州開拓そのものについて深く考え、その省察を実践に移したのは、記録を残さなかった父親のほうであるかもしれない。彼は沖縄に引き揚げた後、戦後ボリビア移民として、海外沖縄移民の渡航地において最も過酷と言われたボリビアに、再び渡航したことが読谷村史には記されている（読谷村 2002 : 692）。2年後に刊行された『読谷村史』には、キクの母親であるサチの体験記録が収録されている。満州とボリビアへの渡航を経験し、調査時にはブラジルに在住しているサチは、「すでに満州に住んでいた人を追い出してそこに住んだ」満州開拓と、原野や森林を最初から切り拓いて農地をつくり、「向こうの人から感謝されている」ボリビア移民の違いに言及している（読谷村 2004 : 678）。
- 5) 飯高伸五 : 2009 などがある。

文献

- 安仁屋政昭, 1996, 「戦後沖縄における海外引き揚げ」沖縄県立図書館資料編集室『資料編集室紀要』21号
- 阿部安成・加藤聖文, 2004, 「『引揚げ』という歴史の問い方」滋賀大学経済学会, 『彦根論集』348号, 129-154.
- 飯高伸五, 2009, 「旧南洋群島における混血児のアソシエーション—パラオ・サクラ会」琉球大学移民研究センター『移民研究』5号
- 石垣市, 1984, 『石垣市史 市民の戦時・戦後体験記録 第2集』
- 浦添市, 1984, 『浦添市史 第五巻 資料編四 戦争体験記録』
- 沖縄県, 1971, 『沖縄県史 第九巻各論編八 沖縄戦記録一』
- 北中城村, 2001, 『北中城村史 第3巻 移民・本篇』
- 宜野座村, 1987, 『宜野座村誌 第2巻 資料編一 移民・開墾・戦争体験』
- 城辺町, 1996, 『城辺町史 第2巻 戦争体験編』
- 国頭村, 1992, 『国頭村海外移民史 本編』
- 東風平町, 1999, 『東風平町史 戦争体験記』

- 座間味村, 1989, 『座間味村史 下巻 戦争体験記 資料編・索引』
- 鳥山 淳, 2006, 「沖縄戦をめぐる聞き書きの登場」岩波講座『アジア・太平洋戦争六 日常の中の総力戦』381-406.
- 北谷町, 1995, 『北谷町史 戦時体験記録』
- 名護市, 1985, 『名護市史 語り継ぐ戦争 市民の戦時・戦後体験記録 第1集』
- 那覇市, 1978, 『那覇市史 市民の戦時・戦後体験記録 忘れられぬ体験 第1集』
- 那覇市, 1981, 『那覇市史 資料編第3巻8 市民の戦時・戦後体験記(2) 戦後・海外編』
- 成田龍一, 2003, 「『引揚げ』に関する序章」『思想』955号, 149-260.
- 野入直美, 2008, 「生活史から見る沖縄・台湾の双方向的移動」蘭 信三編著『日本帝国をめぐる人口移動の国際社会学』不二出版, 559-592.
- 野入直美, 2011, 「植民地台湾における沖縄出身者 — 引揚者在外事実調査票から見えるもの」蘭 信三編著『帝国崩壊とひとの再移動 — 引揚げ, 送還, そして残留』アジア遊学45号, 勉誠出版, 159-169.
- 野入直美, 2013, 「沖縄における台湾引揚者の特徴 — 引揚者在外事実調査票と県・市町村史の体験記録を中心に —」, 蘭 信三編著, 『帝国以後の人の移動 — ポストコロニアリズムとグローバリズムの交錯点』勉誠出版.
- 宮内久光, 2004, 「旧南洋群島における沖縄県人の世帯と就業 — 引揚者在外事実調査の集計と分析」石川友紀『旧南洋群島における沖縄県出身移民に関する歴史地理学的研究』科学研究費補助金研究成果報告書, 琉球大学, 63-132.
- 宮内久光, 2008, 「南洋に渡った沖縄出身者男性世帯主の移動形態」琉球大学移民研究センター『移民研究』4号, 147.
- 宮内久光, 2009, 「引揚者在外事実調査票にみる沖縄県本籍世帯主の居住地域(1) — フィリピン —」琉球大学移民研究センター『移民研究』5号, 113-122.
- 屋嘉比 収, 2009, 『沖縄戦, 米軍占領史を学びなおす — 記憶をいかに継承するか』世織書房.
- 与那原町, 2006, 『与那原町史 資料編1 移民』
- 読谷村, 2002, 『読谷村史 第5巻 資料編4 戦時記録上巻』
- 読谷村, 2004, 『読谷村史 第5巻 資料編4 戦時記録下巻』

(のいり なおみ・琉球大学法文学部准教授・社会学)

Okinawan Repatriate's Experience in Colonized Oversea Areas: Focusing on Experience Records on Municipality History

Naomi NOIRI

Faculty of Law and Letters, University of the Ryukyus

(Sociology)

Keywords: colonized overseas area, Okinawa, repatriate, prefectural and municipal history, immigration history, record of war

In this paper, I cover the records of the experiences in colonized overseas areas within municipal history published in Okinawa. I inquire into the regional history to bring light on how the experiences of Okinawan repatriates in colonized overseas areas were recorded or were not recorded in the regional history.

Before reading through experience records, using the Overseas Repatriate Fact — Finding Data, I attempt to make a general outline. According to the Overseas Repatriate Fact — Finding Data, there are 13,173 repatriates from the South Sea Islands, 3,120 from the Philippines, 6,504 from Taiwan, 1,899 from Manchuria, and 183 from Korea. In this data, repatriates other than the head of the household were not recorded. In whole, the ratio of agriculture and marine product industry was high in the South East Asian and Pacific areas such as South Sea Islands and Philippines. On the other hand, in East Asian regions such as Taiwan, China, Manchuria, and Korea, the ratio of public services, freelance professions, and manufacturing was high.

Regarding the prefectural and municipal history published in Okinawa, there are 812 records of experiences mentioned concerning Taiwan, Manchuria, the South Sea Islands, and the Philippines. Of the 812 records, 527 were published as war records focusing on the residents' war experiences. 241 records were published as immigration history. Of the prefectural and municipal history regarding the experiences records on colonized overseas area, approximately seventy percent is concerning war and thirty percent immigration.

Here I make a comparison between the contexts of war and immigration. I have selected cases from both war experience records and immigration history to do the comparison. Additionally, I took notice on experiences of minorities such as women and Nisei who was born in the colonized area and made a selection of cases.